たこと、琳派や浮世絵など近世期の日本の図像との親和性を帯びていたこと、などが考えられよう。さらに、明治後半期における複製文化の広がりは、絵画の大衆化をもたらす一方で、一九〇七年の文部省美術展覧会開催に象徴されるような絵画の自律化とも結びついた[一]。こうした状況のなかでのアール・ヌーヴォー風図案の広がりは、絵画・広告・挿絵などのメディアを横断した形での女性像の氾濫、生活の「芸術（デザイン）」化や美術における「生活」への関心の高まりという動きにも関連づけられると思われる。このような文脈を考慮しながら、文芸雑誌の表紙絵の動向についてさらなる検討を試みたいと考えている。

（国際日本文化研究センター特任助教）

一　山梨俊夫「絵はがきの語ること――絵画の大衆化の波のなかで」、そごう美術館編『絵はがき芸術の愉しみ展――フィリップ・バロスコレクション：忘れられていた小さな絵』朝日新聞社、一九九二年、二一―二二頁。

ベトナムにおける日本学研究の現在

グエン・ヴー・クイン・ニュー

日本とベトナムの間には政治体制の違いがあっても、友好関係を促進していく基礎、つまり市民レベルでの協力の基礎がある。そのような友好的な背景の中で、ベトナムでは日本語を勉強する人が増えており、さらに日本について調べたい、研究したい人も増えている。ベトナムの高等教育における高度な人材育成を実現させるための日本語学習を普及させることを目的として、近年の日本学研究の背景とこれからの課題について紹介していきたい。

【日本語学習者急増】

日本語教育の歴史については、近年の三〇年間、つまりベトナムドイモイ（一九八〇年）改革時代以降から日本語教育が大きく発展している。ベトナムにおける日本語学校、日本学科などが相次いで設立され、その結果、日本語学習者も急増している。以下では、ベトナムの日本語教育の歴史的な流れ、日本語学習への動機について、そして、ベトナムにおけ

る日本文化受容、日本学研究の主要な対象やその状況と現在の課題について紹介する。

その日本語教育発展には「官民」一緒になって、という形で、国立、私立・民間であるかという違いは関係なく、日本語学校は増えている。一九九一年にホーチミン市人文社会科学大学において、日本の協力により最初の日本語クラスが開講された。そしてその三年後、日本語学科が設立され、二〇一五年に日本学部になっている。同時に、大学だけではなく、中学校や高校でも、二〇〇四年からモデル校において日本語教育がスタートした。さらに、この中学校、高校で日本語教育を実施するために、日本語教師を育てる必要があったので、二〇〇八年にはホーチミン市師範大学で日本語学科が設立され、それが今では日本語学部になっている。

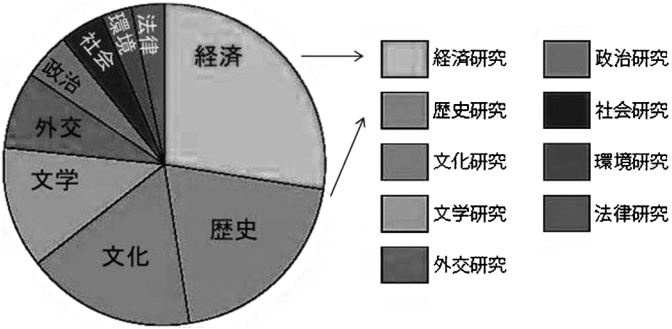
その後、日本とベトナムの関係がますます発展してきた影響で、日本語教育もさらに発展してきた。ハノイ、ホーチミン市といった大都市圏だけではなく、地方にまでも日本語教育が波及しており、全国での日本語学習者が増えている。日本語は英語についで第二の外国語になっている。二〇一五年の（独）国際交流基金の調査によれば、ベトナムにおける日本語学習者数は六万四八六三人で、二〇一二年時の四万六七六二人と比べると三八・七％増加しており、世界でも八番目の数となっている【国際交流基金ホームページ 日本語教育国・地域別情報】。中等教育（中学、高校）レベルでは、日本語は正規の第一外国語になっている。更に、二〇一六年期「二〇二〇年期国家外国語プロジェクト」のもとで、小学三年生からの日本語教育導入が開始された。近年、最適な学習環境を作るため、日本語教育に新しい日本語教育のマスタープランカリキュラム、シャドーイング学習などを導入されている。

では、なぜ、ベトナム人の若者たちは日本語学習にそんなに興味があるのだろうか。その理由としてはまず、いわゆるクール・ジャパンの影響が挙げられる。アニメ、マンガ、音楽などの分野で日本の魅力的な文化が入ってきたことにより、日本語を勉強し、そして日本文化をより理解したいという人が増えている。国際化時代における現在のベトナムでは、特に日本とベトナムの関係が非常に密接になっていることを反映して、日本のものなら何でも、と言ってもいいくらい、伝統から現代までの文化などにますます興味が持たれ、取り入れられるようになっている。そして日本の現代的な文学作品、例えば、村上春樹や、よしもとばななどの世界的

な人気作品が、ベトナム語でも翻訳・出版された。日本のポップカルチャーの受容が、日本文学への興味と密接に関連しているのではないか、という仮説も生じるのだ。

【日本シンポジウム多発】

一九七五年以前は、ベトナム戦争の影響により、ベトナムでは日本研究がほとんど行われていなかった。ベトナム北部では、日本文学の翻訳・研究があったが少なかった。一九七六年から一九九二年まで、日本人学者がベトナムの研究所（社会科学研究所、漢喃研究所、東アジア研究所、世界政治経済研究所等）を訪問し、ベトナムにおける日本研究を促進させた。日本語を話せるベトナム人学者が日本研究への関心を高めさせた。これはベトナムにおける日本研究の最初の段階と言える。そして、一九九三年から二〇〇三年まで、日本人の学者が相次いでベトナムを訪問したり、ベトナムの大学が日本学教育を紹介・導入したりして、日本への関心が高まった。ベトナム政府は外交上の理由もあり日本研究を重視した。その結果、いくつかの研究所が設立された。中でも重要なのが、日本の協力で一九九三年九月一三日に、ハノイで開設された日本研究センターである。



分野別の日本研究者数

ファン・ハイ・リン「新時代におけるベトナムの日本研究」世界の日本研究 2014（ハノイ）

そして、日本の各財団、国際交流基金、大学等との協力及び支援により、ベトナムでは、日本研究セミナーが定期的に行われ、日本研究促進に貢献している。一九九四年、ホーチミン市国家大学人文社会科学大学で東洋学部日本学科、そして、一九九五年、ハノイ大学東洋学部日本学科が設立された。その後、二〇〇九年からホーチミン市人文社会科学大学において日本に関するシンポジウムが相次いで行われ、同大学は日本研究の拠点として評価されている。分野別に見ると、最も盛んな分野は日本経済のようである。

ドイモイ以降、ホーチミン市人文社会科学大学では日本に関する国際的なシンポジウムを数多く開催してきた。主に経済や歴史に注目して日本を研究しているハノイとは違って、ホーチミン市を含むベトナム南部では日越関係及び日本文学に関するシンポジウムが多く行われてきたという傾向がある。ホーチミン市国家大学人文社会科学大学は、南部唯一の日本研究の拠点として、日本関連学術シンポジウムを盛んに行っている。

二〇〇九年　沼野充義「日本文学セミナー」『源氏物語』から村上春樹、村上世代まで

二〇一〇年「日本と漢字文化圏諸国（ベトナム・中国・韓国）の文学における近代化」

二〇一一年「一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての日本ベトナムの「文明開花」」の比較研究

二〇一一年「日本とメコン川地域―歴史的関わり」

二〇一三年「越日関係四〇年の成果と展望」

二〇一五年「日本語教育国際シンポジウム」（於、ホーチミン市師範大学日本語学部）

二〇一六年「近世期日越関係史」

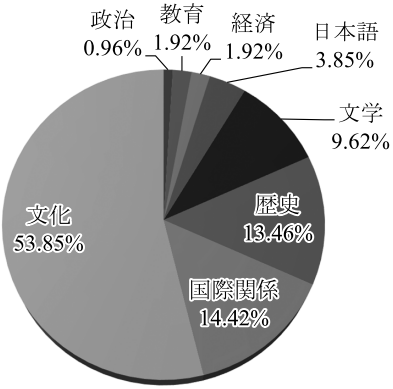
二〇一八年「越日関係四五年の成果と展望」

二〇一九年「日越俳句交流会」

二〇一九年「明治維新とベトナムドイモイ（革新）」

【日本語教育における日本研究の位置づけと今後のあり方】

ビジネスに役立つ実利的な日本語教育が偏重される中、学術的な日本研究は一体どのようになってしまうのかと懸念している。日本語教育と日本研究の連携、日本語を習得した若手の学者や研究者を日本研究の分野に取り込んで行くことは、日本語教育への関心が高まっているベトナムでは有効な



2018 学年度 日本学部学生の研究テーマ

手段となるだろう。一方、高度人材の育成、経済発展への貢献も重要である。日本研究者や教員ではなく、若者である学生は日本について何に関心を持っているのか、何を研究したいのかについて調べてみた。まず、二〇一八年の学年度のホーチミン市人文社会科学大学日本学部の学生について調べたが、学生達の研究テーマは多岐にわたっている。

具体的には、下記のテーマへの研究関心があるようだ。

・政治：日本の鎖国、明治維新
・文化：和紙、お土産、妖怪、温泉、おもてなし
・社会：祭り、家庭内暴力、ベトナム人留学生
・教育：現代社会の子供教育、漢字の役割
・文学：源氏物語におけるものの哀れ、俳句、文学翻訳、文学の現代化

研究分野の割合では文化・社会が一番多い。次に、国際関係、歴史、文学などである。ベトナムの中でも発展していて活発なホーチミン市の姿を反映してか、文化と社会に多くの学生が興味を持っているようだ。

【「一般市民のための日本学の研究」困難点や期待】

日本語学習者が急速に増え、日本研究への関心も高まっている現在、より実践的な日本文化・文学を更に探究・発展・飛躍させるためには、日本文学研究は不可欠である。人文社会科学分野で日本を研究対象としている学者や研究者が出ているが、日本語を理解し、日本語の文献・資料に基づいて日本研究を行っている者は非常に少ない。また、ベトナムにおける日本研究の課題としては、日本語のできる人材や日本語文献の不足が挙げられる。研究分野によっては、日本語によ

る研究が今後増えると期待している。今までベトナムの日本研究は、日本（国際交流基金、各民間財団など）から客員教授派遣、ベトナム人の訪日研究、日本語文献の提供、日本文学作品翻訳・出版支援などという形で支援を受けてきた。ただ、日本語文献が非常に不足している上に、日本語教材が効果的に使用・開発されていないため、ベトナムにおける日本教育・研究はまだ不十分・不確実な状況であると考える。

さらに、高度人材の育成及び社会に出てから役に立つ知識を教えるという「有益な」、「実利」教育が支配的な現在の日本語教育形態の中で、学術的な日本研究が充実することを願っている。国内外の発展状況の変化に直接的な影響を受けるベトナムにおいて、日本語教育・日本学は今後どのように展開されているだろうか。また、日本経済、日本史、日越歴史関係などの研究が多いと感じるが、伝統的な価値がある古典文学に対して、一般市民がもっと親近感を持つようになって欲しいと願っている。

【まとめ】

グローバル化の進展に伴い、日本学が世界に普及している中、日本語学習者が急速に増えているベトナムでの専門的な日本言語教育・日本学の研究が更に探究・発展・飛躍されることを願っている。日本語を理解し、日本語の文献や日本に関する新たな教育・研究情報に接触することができ、研究を行うことのできる研究者が今後求められている。社会に出てから実際に役に立つことが重視され、「有益」で、「実利的」な教育が支配的な現在のベトナムの日本語教育において、利益追求でない、専門的な日本学の研究を充実化することが必要である。特に日本学に焦点して、日越比較研究を強化させ、学術交流を積極的に進めれば、ベトナムにおける日本研究者を育てることもできると考える。

（ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学講師／国際日本文化研究センター外来研究員）

「思煩之時」―礼儀作法の歴史を文書から研究する意義について

マルクス・リュッターマン

日常茶飯事、衣食住の細々な作法から倫理、法律などに至